

(6) ミニッツ署名交換 (7月25日 17:00-18:40)

場所	マニコレ市内の小学校
参加者	吉田団長、定森氏、大塚耕智所員、富田団員、マニコレ市長、マニコレ市議会議長、マニコレ市保健局保健監視部長、マニコレ市議会議員、MSH ボランティア、CHWs (84名)、看護師
協議項目	<ul style="list-style-type: none">● マニコレ市紹介のビデオ● 署名者挨拶● ミニッツ署名

概要	<p>先日の実施協議の結果を経て、内容を修正したミニッツを準備し署名交換を行った。市側の希望により、給与を受け取りに来ていた CHWs 84 名も参加して署名交換式が開催された。</p> <p>【マニコレ市紹介のビデオ】</p> <p>ビデオの内容は、2001 年から今までの 1 年半ほどのマニコレ市行政を中心に構成されていた。従って、現市長になってからのマニコレ市の行政を紹介した内容となっている。ビデオを見る限り、現市長の政策は、「医療保健体制の充実」、「コミュニティごとの初等教育施設の充実」が中心であった。実際に各コミュニティを回った感想としては、コミュニティの初等教育施設 (小学校) は、新たに建設されるか、または改築されていた。</p> <p>【署名者挨拶】</p> <p>挨拶は、保健局保健監視部長、市議会議長、定森徹氏、吉田丘団長、市長の順番で行われた。定森氏からは、HANDS が JICA と共同で実施する事業内容について説明がなされた。すなわち、HANDS、JICA、マニコレ市の協力によって、ア) CHWs へのセミナーの強化、イ) CHWs の基礎的備品 (血圧計・体重計・体温計等) の整備、カ) 保健局の指導監督体制の強化、ク) 緊急連絡システムの整備、等を行っていく、というものである。続いて吉田団長からは、ア) コミュニティを視察して、JICA がマニコレ市のために協力していく意義が見出せたこと、イ) プロジェクトは JICA と HANDS が共同して実施するが、コミュニティの保健衛生状況が改善するか否かはマニコレ市当局と CHWs の活躍にかかっていること、という挨拶がなされた。これらの日本側からの挨拶を受けて、市長からは、JICA および HANDS のマニコレ市での事業実施について感謝すること、マニコレ市も CHWs も、事業実施について誇りを持っていること、等が話された。更に市長は、CHWs に対して、JICA 及び HANDS の活動は、CHWs のために JICA と HANDS が市との協力により実施するものであり、資金がマニコレ市に入ってくるわけではないので、プロジェクトの成果を最大にするのは、CHWs の取り組みにかかっているため、是非ともがんばってほしい、との呼びかけを行った。</p> <p>【ミニッツ署名交換】</p> <p>市長の挨拶終了後、MM の署名交換が行われ、マニコレ市、JICA、HANDS の 3 者がそれぞれ署名交換後の MM をポルトガル語と英語の 2ヶ国語でオリジナルで保管することとなった。署名交換の最中、保健監視部長より MM の内容が CHWs に対して読み上げられた。</p>
----	---



[プロジェクト概要につき説明する定森氏=左]



[署名前の挨拶をする吉田団長=右]



[M/Mに署名する市長、吉田団長、定森氏とM/Mを読み上げる保健監視部長=左]
[会場に参集したCHWs=右]



所感

ミニッツの署名交換は、盛大に行われた。CHWs及びマニコレ市の医療関係者が集まり、その前で、市長、保健局保健監視部長、市議会議員、吉田団長、定森氏の5名が署名に際しての挨拶を行い、これから始まる草の根技術協力事業に対する期待の大きさがうかがわれた。署名交換式に参加したMSHのMs. Caryl Feldackerによれば、「あなた方がマニコレ市に対して実施する事業内容を聞いて、多くのCHWsたちが、自分たちの役割にとっても誇りを持てるようになった、と語っている」ということであった。2時間近くに及ぶセレモニーも、CHWsの活動に対する期待と役割に対する誇りを喚起することができたのならば、成功であろうと思った。

(7) プロジェクトサイト視察 (7月26日 07:00-14:00)

場所 デモクラシア (Democracia)、テーハ・プレタ (Terra Preta)、ジャグアルアーナ (Jaguaruana)

参加者 吉田団長、定森氏、大塚耕智所員、富田団員、MSHの保健指導員 (Ms. Caryl Feldacker: キャロル)、Gethal マニコレ事務所長 (Mr. Cardoso: カルドーフ)

視察項目 マデイラ川流域の3コミュニティ (Democracia, Terra Preta, Jaguaruana)

概要 {デモクラシア (Democracia)}

デモクラシアは、マニコレ市街からマデイラ河を1時間ほど遡った地点にある。コミュニティの成り立ちは、ヨーロッパからのユダヤ人移住者による開拓であるが、第2次大戦中にラビが殺害されてからユダヤ人口は急激に減少し、現在はユダヤ人は居住していない。デモクラシアには、協力企業である Gethal Amazonas の集木場があり、合板加工場への積み出しを行っている。Gethal は、デモクラシアに伐採木を集積するとともに、ブラジリアンナッツの集積・乾燥場を置いている。ブラジリアンナッツの出荷は、現在 Gethal がコミュニティにあるナッツ採取者協同組合に協力して試験的に実施しているものである。また、デモクラシアは現在は閉鎖されているものの、マナウスから南に伸びる幹線につながるこの辺りの唯一の陸路の到達地点でもあった。

1. 伐採木



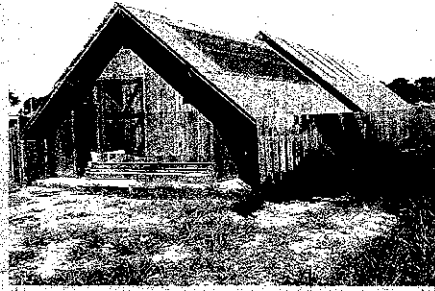
この伐採木の樹液は、様々な使い道があり、古来からインディオが薬液として利用していた。カルドーフ氏は、この木については伐採せずに立ち木のまま樹液を採取するような利用方法を考えている。MSHのキャロルは、コミュニティのインカムジェネレーションに取り組んでいることから、カルドーフ氏と熱心にこの木の利用方法について検討していた。

2. デモクラシアの港からの風景



デモクラシアの中心は、ここよりも西にある。この地点は Gethal の伐採木積み出しのために新たに作られた入り口である。前方に見える橋は、積み出し道路のために左右に分断されたデモクラシアをつないでいる。カルドーフ氏によれば、小学生の通学路のために建設したものである。

3. ブラジリアンナッツの乾燥小屋



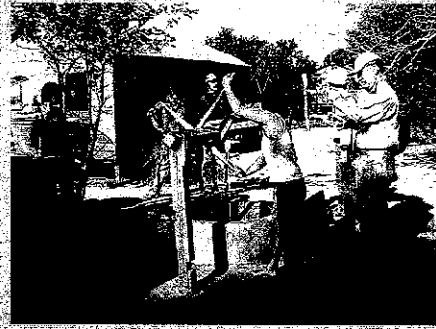
ブラジリアンナッツを巡っては、採取者協同組合と Gethai の間で当初は揉め事があったようであるが、Gethai が「果実のなる木は伐採しない」という方針を打ち出し、更に、カルドーゾ氏が協同組合のために乾燥小屋を建設し、ナッツの販路拡大事業を手助けしたことによって、現在は共同者の関係となっている。カルドーゾ氏は、ブラジリアンナッツの協同組合運営と販路拡大を「ナッツプロジェクト」として今後も拡大していきたいと語っていた。MSHのキャロルも所得向上プログラムを運営していく関係上、関心を持っていた。

5. ブラジリアンナッツ①



ブラジリアンナッツは、ハンドボール大の外殻の中に 20 個ほどの実が詰まっており、収穫量は多い。外殻と実(種)の周りの殻は固く、実を取り出すには、ナタのような刃物が必要である。ブラジリアンナッツの実には脂肪分を多く含み栄養価は高い。

4. 従来型の井戸



従来型の井戸は、簡易な仕組みであり、蓋がなく、定森氏の説明では、大腸菌に汚染されやすい。このため、定森氏はマニコレ市内にあった簡易井戸の設備を普及させたいとしている。井戸から汲み上げられた水は、透明度は比較的高く、一見すると問題は無いように感じられるが、雨季には水質が悪化するという。また、確かにつるべのロープを巻き取っていく方法のため、水汲みを仕事とする女性にとっては重労働である。

6. ブラジリアンナッツ②



ブラジリアンナッツの木は、高さが 20~30m 以上にもなる巨木で、写真でもわかるように、たくさんの実をつける。大きく硬い実なので、「ナッツの木の下には立つな」といわれるくらい、落下するときには危険である。

{テ-ハ・プレタ (Terra Preta)}

テ-ハ・プレタはポルトガル語で「黒い土地=豊かな土地」を意味する。このコミュニティは、デモクラシアから現在は途絶えてしまった幹線へのアクセス道路を車で 20 分ほど走ったところにある。Gethal の伐採サイトに近く、道路に直接面しているため、便利ではあるが、砂埃等であまりよい環境とはいえない。Gethal はこの近辺には 40,000ha の伐採サイトを持っているが、彼らの樹木伐採の方法は、1ha につき 4 本程度の伐採しか行わない。また伐採される木も「一番大きく、換金率が高いもの。果実がなるものについては伐採しない」という原則に基づいて選抜される。

テ-ハ・プレタのコミュニティは、CHWs があまりうまく機能しておらず、コミュニティ自体もやや荒廃しているというのが、同行した Gethal のカルド-ズ氏の説明であった。

1. アマゾンの森林

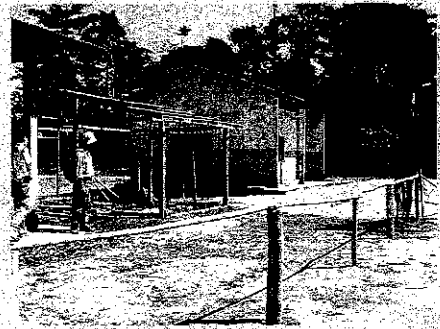


デモクラシアから、Gethal の伐採サイトまで、トラックに乗って移動。道路はこのあたりで唯一のものであるが、当然未舗装であり乾季の現在は、凹凸砂埃で移動は容易ではなかった。伐採サイトは車で約 30 分ほど走ったところにある。テ-ハ・プレタは、その途中に位置している。

3. テ-ハ・プレタの子どもたち



2. テ-ハ・プレタの小学校



テ-ハプレタの小学校は、道路に面しており、この時期は冬休み中であつたが、時折通過する材木会社のトラックが巻き上げる砂埃で教室の中まで埃が積もっていた。

左の写真は、テ-ハ・プレタの子どもたち。顔立ちはそれぞれ違うが、姉妹と従姉妹。子どもは、ある程度大きくなると着衣であるが、小さな子どもは上半身は衣服をつけていない。女の子が抱いている赤ちゃんは男の子であるが、女の子たちと違い、目や肌の色は、白人そのもの。

{ジャグアルアーナ (Jaguruana)}

ジャグアルアーナは、マデイラ河左岸の支流沿いに奥地へ広がるコミュニティである。雨季にはマデイラ河から支流沿いに小型船で溯れるが、乾季であった今回の調査時には支流の水量が少なく、ボートを降りてジャグアルアーナに上陸し、徒歩で10分ほど支流を溯ってからカヌーに乗って湖を渡り、再度上陸してコミュニティの奥地へ向かった。このコミュニティをカルドーン氏が案内した理由は、Gethalがナッツ採取者協同組合と実施しているブラジリアンナッツ協同販売のプロジェクトに参加し、所得向上に成功した家族があるからであった。

1. ジャグアルアーナへのマデイラ河支流



ジャグアルアーナへは、マデイラ河から直接に上陸することも可能であるが、雨季にはこの支流を溯って各家に至ることも可能である。

3. ジャグアルアーナの小道



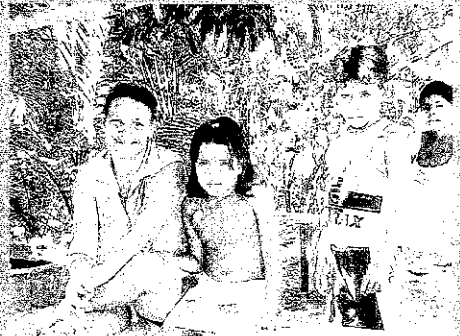
熱帯雨林というと、鬱蒼とした森を想像するが、マニコレ近辺の森はそれほど高木があるわけではない。しかしそれでもジャグアルアーナの森は比較的高木があり、森の密度も濃い。

2. カヌーに乗る。



左の写真に見えるカヌーに7名で乗ろうとしたが、転覆しそうなので結局諦め、富田団員とキャロルは徒歩で川沿いを上った。

4. 湖の集落の親子



支流を溯ると湖があり、ジャグアルアーナの中のひとつの集落がある。これは湖から上陸して最初の家の家族。

5. 牛の放牧



コミュニティの中には、牛の放牧を行っているところもある。ここではじめて気づいたことであるが、河川が主な交通手段であるため、1件の家の土地は、川岸から斜面を登って分割されていることが多い。つまり、コミュニティは可能なところでは河川に沿って家々が並んでおり、個々の家が河川にアクセスできるように配列されている。

6. 湖



ジャグアルアーナは、マテイラ河の支流がその合流口で狭められてできた、湖に沿って集落が伸びている。マテイラ河と異なり支流の水は濁っておらず、透明度は高い。ただ、マテイラへの合流部が狭いため、支流の水位は雨季と乾季の差異が大きく、15m ほどもある。上の写真では、雨季には牛が見える地点よりも上に水面が来る。湖（支流）は大切な交通手段。

7. ジャグアルアーナの家族①



ジャグアルアーナであった家族。14 人兄弟姉妹だという。外は炎天下であるが、高床式の家屋は意外に涼しかった。

8. ジャグアルアーナの家族②



右端の女性が写真の子どもたちの母親。今まで18人の子どもを出産した。今までに病気で4人を失っているという。質問をしたCaldoso氏に対して、「4人死んだけれど、14人生き残っているから十分」と語った。淡々とした語り口に子どもを失った悲しみというものを超越した何かが感じられる。

9. 家屋



特に一定した形式というものは無いようであるが、高床式の家も多い。これらの家は入ってみてわかったが、かなり暑さをしのぐことができる。

10. 焼畑の煙



ジャグアルアーナからの帰途、マニコレ市の方角に焼畑の煙を見る。焼畑では、マンジョッカを育てる。

所感

距離的にはマニコレ市内からモーターボートで1時間以内のコミュニティを3つ視察した。Mr. Caldosó と MSH の Caryl が調査団に同行したことにより、内容は充実したものとなった。特に今回の視察で印象に残ったのは、Caldoso 氏と Gethal Amazonas のコミュニティに対する活動であった。前にも述べたが、Caldoso 氏は、HANDS や MSH の活動を支援している。しかしそれだけにとどまらず、コミュニティの生活向上のために独自の活動を行っている。具体的には、アマゾンのコミュニティで産出する第1次産品の販売体制を構築することであり、対象となる産品としては、ブラジリアンナッツと特定の樹木から取れる樹液である。このうちブラジリアンナッツについては、既にナッツ採取者協同組合と試験的に販路促進を開始しており、成果が現れ始めているとのことであった。樹液については、現時点では製品化を検討しているということであった。

Caldoso 氏の活動を見て思ったことであるが、材木会社である Gethal Amazonas がごく自然にコミュニティの人々の生活向上に協力し、共生している姿は、とても印象深いものであった。今回、Caldoso 氏が案内してくれた行程は非常に厳しいものであったが、それは彼自身のコミュニティ開発に対する熱意の表れであると感じられた。

(8) マナウス総領事館への報告 (7月28日 14:00-15:30)

場所 マナウス総領事館 総領事室
参加者 吉田団長、定森氏、富田団員、高橋総領事、関川領事
協議項目

- マニコレ市での活動概要
- プロジェクトの開始時期
- 草の根無償資金協力事業との関連について

概要 {マニコレ市での活動概要}

まず高橋総領事から、マニコレ市の様子について質問があった。これに対して、吉田団長からは、以下のように回答した。

- マニコレ市の市域は北海道の約半分ほどの広さで、そこに4万2千人くらいの人口があり、マニコレ市内には1万3千人がいる。
- マニコレ市政は、住民の生活のためのインフラストラクチャー整備を積極的に行っており、上水道施設、病院、保健所、発電所などが近年整備されてきている。
- マニコレ市の保健衛生に対するニーズは高く、僻地での感染症対策、リプロダクティブヘルスに関する知識普及等が特に重点課題である。
- リプロダクティブヘルスに関しては、10代前半に妊娠する女子が多く、性交渉や母子保健に対する正確な知識を普及することは急務である。
- 僻地への連絡・移動は、水上交通で、市内から数時間～3日間必要であり、これら僻地への医療に関する連絡体制および現地での指導は重要である。

これらの回答を聞いた後で、高橋総領事からの質問があり、以下のような質疑応答があった。

(高橋総領事) 話を聞くとマニコレ市での生活は厳しいようであるが、そこに女性である竹井潤子氏が一人で生活することについては大丈夫か。

(定森氏) 外国人が犯罪等に巻き込まれる確率は、むしろマナウスのような都会の方が高いのではないか。マニコレでは、当然外国で暮らす上での注意は必要であるが、犯罪等に巻き込まれることは蓋然性として低いと考えられる。

(高橋総領事) 問題なのは、竹井さんのメンタルな面でのことである。マナウスでは我々は商社や領事館の家族で日本人のコミュニティを作っているのだから、現地人とは互いに理解しにくい日本人どうしのコミュニケーションがあり、それが我々のメンタルな面での救いとなっている。2年半～3年間現地人の中でただ一人の日本人として活動するのは、そういった面からも困難を伴うのではないか。

(関川領事) 総領事の心配ももっともであるが、青年海外協力隊なども2年間ただ一人の日本人として現地人の中で活動してきている。

(高橋総領事) 私のアフリカでの経験から、青年海外協力隊でも、必ずしもしっかりと活動できない例も多く聞いている。

(定森氏・吉田団長) 竹井さんの活動のフォローについては、定森氏が1ヶ月に1回、最低でも2ヶ月に1回はマニコレ市を訪問し、1週間程度は滞在する。JICAからも担当職員が3ヶ月に1回位の間隔で現地に行ってモニタリングを行い、事業のフォローを行う。また、マニコレには、アメリカのNGOから派遣されたアメリカ人女性が活動しており、その女性とも協力して事業を進めていくことが合意されている。

{プロジェクトの開始時期と草の根無償資金協力事業}

プロジェクトの開始時期については、HANDS が必要な手続きをとる時間を考慮して、10月を目途とすること、マニコレには草の根無償資金協力でも必要な基盤整備を行う意義があること、等が吉田団長から報告された。それについて、関川領事との話し合いの中で、次のことが決定された。

- 第3四半期での草の根無償への応募は、9月までで締め切りであり、現在すでに数件の案件が応募されている。領事館としては、これらの案件の中から第3四半期の採択案件を決定する。本件については、それ以後の応募が望ましい。
- 第4四半期は、一応募集をかけるが、本来は案件の採択を行わない。ただし、本件については、第3四半期中に応募してもらえれば、最優先案件として審査する。
- 草の根無償応募の際には、関川領事も現地を視察する。

所感

総領事館においては、関川領事から非公式に表明された「草の根無償資金協力事業」への申請の可能性に調査団として、ブラジルまでやって来た意義を感じた。今回、JICAの調査団がマニコレの現地に入ることが、関川領事の発言を促す結果となった。NGOが、「草の根無償資金協力」と「草の根技術協力」の両制度をうまく組み合わせて利用することによって事業の幅もでき、ODAにおけるNGO連携もその実を最大限にすることができると考える。

また、関川領事がマニコレ市訪問の意図を表明したことについて、プロジェクト開始後の訪問をHANDS側で計画するよう、促していきたい。

(9) 在ブラジル日本大使館報告 (7月30日 11:00-12:00)

場所 在ブラジル日本大使館

参加者 吉田団長、定森氏、ブラジル事務所現地スタッフ、富田団員、田雑二等書記官、山本公使

- 協議項目
- マニコレ市での活動概況・事業概要
 - ブラジルにおける草の根技術協力事業について

概要 田雑書記官（技術協力担当官）に対し、調査団活動概況及びプロジェクトの概要につき、吉田団長、定森氏から説明を行った。田雑書記官は、技協担当官ということもあり、草の根技術協力事業及び本プロジェクトに関して十分な情報を有しているだけでなく、草の根技術協力事業に対して理解を示している。田雑書記官からの話（非公式）は以下のとおり。

- 草の根技術協力事業に対して、特に本プロジェクトに関しては（中南米における第1号案件として）、在ブラジル日本大使をはじめ、在伯日本大使館は非常に注目している。
- 田雑書記官は、担当官として今回の調査団にも同行するつもりであったが、ブラジル政府と日本政府の間のヒザ発給問題に関して多忙であり、かなわなかった。事業開始後は、田雑書記官も現地サイトを視察の強い希望がある。
- 事業実施について、大使館で支援できることがあれば申し出てもらいたい。前述のとおり、大使も注目しているので、便宜が図れることもあると思う。

所感 田雑書記官からの提案は、ブラジルでの草の根技術協力事業の実施について明るい展望を示すものである。田雑書記官のプロジェクトサイト訪問は、HANDS、ブラジル事務所と連絡を取り、プロジェクト開始後に実現したい。